

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	平成 27 年度
氏名	茂木 友里絵	指導教員 (主査)	沢崎 達夫

論文題目	大学生における本来感及び被受容感が怒りの表現と抑うつへ与える影響の検討
------	-------------------------------------

本文概要

**【問題と目的】** 現代青年の特徴として挙げられている過剰適応と自己中心的な心性を理解する一つの重要な観点として、内外適応のバランスがある。内的適応を示すものとして、本来感が挙げられ、外的適応には、被受容感が挙げられる（鈴木・小川，2008）。本来感と被受容感のバランスは、感情表現に影響を与えるものであると考えられ、対人関係において、より重要な問題となりうる（木野，2000）ため、怒りの感情に注目する。怒りの表現方法は、表出（攻撃的）、抑制、主張的な表現に分類され（Müller, 1993）、本来感と被受容感のバランスから考えると、本来感が高く被受容感が低い場合、自己中心的になる可能性があり、攻撃的な表出となることが推測される。一方、被受容感が高く本来感が低い場合には過剰適応的になる可能性があり、抑制された表現となることが推測される。怒りは精神的な不健康状態を高める可能性が指摘されている（佐々木・山崎，2004）が先行研究では異なる結果も得られているため、改めて怒りの感情表現と抑うつとの関連を検討する。本研究では、本来感と被受容感の 2 水準のバランスが怒りの表現および抑うつにどのように影響を与えているか検討する。怒りの表現は抑うつにどのような影響を与えているかを検討し、大学生の対人関係における不適応への理解を深めることを目的とする。

**【方法】** 調査対象：4 年制大学に通う大学生 310 名を対象に質問紙調査を行った。質問紙の構成：①フェイスシート（学年、年齢、性別）②本来感尺度（伊藤・小玉，2005）③日本版 Müller Anger Coping Questionnaire（大竹ら，2000）④自己評価式抑うつ性尺度（福田・小林，1973）⑤被受容感尺度（杉山・坂本，2006）倫理事項：調査の協力は自由意思であり、回答を拒否する権利があること、得られたデータは統計的に処理し個人が特定されないこと、また得られたデータは本研究以外には使用しないことを口頭及び文章にて説明した。

**【結果】** 本来感得点 ( $M=19.85$ )・被受容感得点 ( $M=28.09$ ) を平均値で H 群 L 群に分け、HH 群、HL 群、LH 群、LL 群に分けた。4 群を独立変数、怒りの表現得点・抑うつ得点を従属変数として、一元配置分散分析を行った結果、「怒り主張性」に有意な主効果が見られ ( $F(3, 306)=9.510, p<.001$ )、多重比較を行った結果、HH 群>LH 群・LL 群 ( $p<.05$ ) に有意な差が見られた。抑うつ尺度に有意な主効果が見られ ( $F(3, 306)=29.12, p<.001$ )、多重比較を行った結果、LL 群>HL 群・LH 群>HH 群に有意な差が見られた ( $p<.05$ )。本来感と被受容感の得点・怒りの表現の下位尺度得点を独立変数、抑うつ尺度得点を従属変数として重回帰分析を行った結果、決定係数  $R^2=.43$  で、「怒り抑制」は抑うつに正の影響力を有していた ( $\beta =.10, p<.05$ )。

**【考察】** 本来感および被受容感が怒りの表現と抑うつに与える影響を検討した結果、怒りの主張性に対する本来感の重要性が示された。自分を大切にすることは自分の感情も大事にすることにつながっており、そのことが怒りを主張するという行動に影響を与えていると考えられる。また、怒りを抑制することは抑うつを高めると示された。怒りを抑制させるのではなく、怒りを自己の大切な感情として受け止めること、その感情を相手に伝える「主張」することが重要であると考えられる。これらのことを予防教育の一つとして取り入れることにより、怒りの表現に対する抵抗感を和らげ、対人関係における不適応の軽減につながると考えられる。

**【引用文献】** 大竹恵子・島井哲志・曾我祥子・宇津木成介・山崎勝之・大芦治・坂井明子・西信雄・松島由美子・嶋田洋徳・安藤明人(2000). 日本版 Müller Anger Coping Questionnaire (MAQ) の作成と妥当性・信頼性の検討 感情心理学研究, 7(1) 13-24.